

第5章 住まいの中の医院

——天草市牛深町——

森 隆男

はじめに

天草市牛深町は牛深港を中心に民家が密集した漁村集落で、狭い路地が複雑に交差している。旧河野道人家は、この地で昭和60年まで内科・小児科を開業していた医院である。当家の出身である西岡章子氏（昭和22年生まれ）によると、氏の父が誕生した明治34年には建築されており、すでに築110年を経ていることになる。この事例は住まいの中に優先的に生業の空間が確保された場合、生活の場や接客の場がどのように配置されるかを考える上で興味深い。

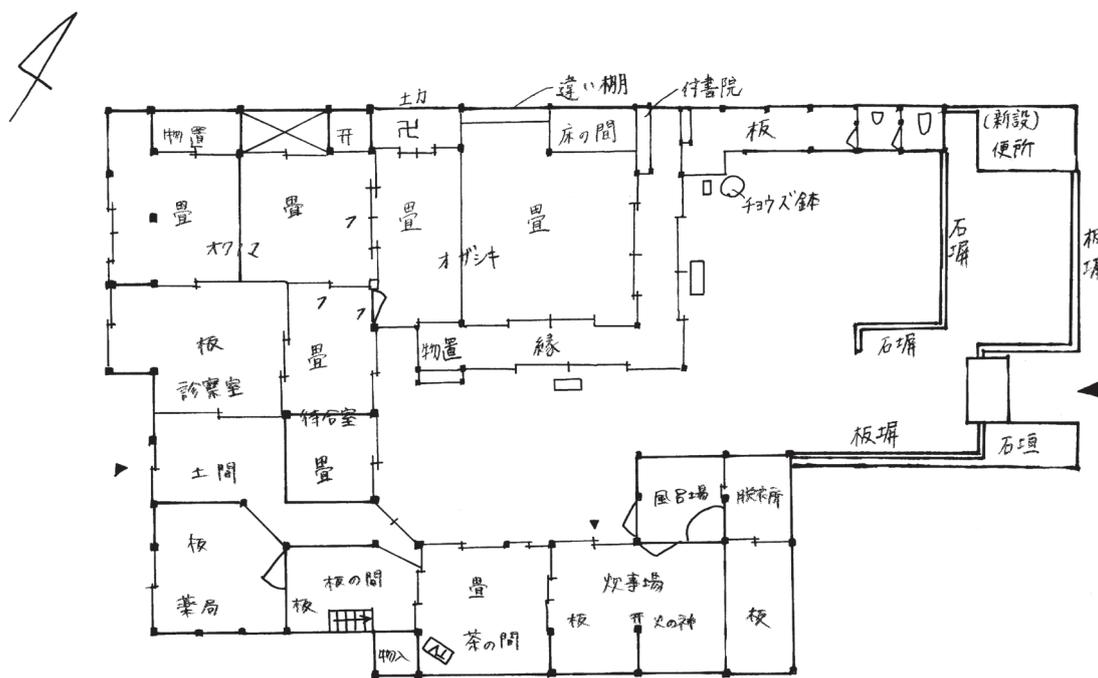


図 旧河野道人家間取り図（椿原佳恵・西田麻美作成）

河野家の概要

河野家は主屋が切り妻平入りの瓦葺民家で、中庭を囲んでコの字型に3棟の建物が配置されている。漁村集落においては比較的広い敷地といえる。ホンドオリと呼ばれる集落の主要道路に面した主屋の正



写真1 河野家正面の外観



写真2 オザシキに続く勝手口



写真3 裏庭に築かれた重厚な石塀



写真4 待合室（右奥は薬局）

面は、1階の開口部は格子戸、2階は虫籠窓になっている。開口部を除き漆喰が塗られ、格子戸とのコントラストが美しい外観を創り出している。かつては炊事場と風呂に接して土蔵が建てられており、使用人の部屋に当てられることもあった。また裏庭には杏や榎などが植えられ、切石を積んだ石塀が築かれている。その奥に便所が新設されて、板塀で囲まれることになったようである。

間取りは基本的に商家とよく似ており、オモテ側に医業に必要な診察室と待合室、薬局が、ウラ側には接客空間と生活空間が別棟で配されている。ただしオクノマは家族の寝室に当てられており、その2階は子供部屋であった。医院の診療時間中は患者と家族の動線が交差することはなかった。しかしかつては便所が1か所しかなく、茶の間や台所から中庭を横切って行く必要があり、雨の日は大変であったという。診療時間外は待合室が日常空間と接客空間及び寝室を結ぶ通路になった。

オザシキは当家の格式を示す重厚な造りが施されている。中庭から客を迎え入れることが想定されており、踏み石から縁を経て部屋に入ると、正面に床の間と違い棚、付け書院が目に入る。違い棚の横には仏壇が設けられているが、オモテ側の3畳と区切る敷居があり、そこに建具を入れると仏間になる。造り付けの仏壇であり、当初は独立した仏間であったと考えられる。仏間と客間を区切る欄間には、6枚の鐙を埋め込んだ洗練された意匠がみられる。

オクノマは前出のように通常は寝室として使用されているが、氏神の祭礼の際は格子戸をはずして緋毛氈ひもうせんを敷いた。ホンドオリを通る神輿に神酒を供える場になったからである。



写真5 鏝を埋め込んだ欄間



写真6 仏壇（左は神棚）



写真7 神棚と先祖の像

当家の仏壇は、琉球地方のように比較的高い位置に棚を設けた形態である。棚の下の引き出しには重要な書類を収納し、先祖に守ってもらうという。盆にはタイモの葉に栗や柿の初物をのせて供物とする。また神棚も建築当初の造り付けであり、障子で閉じる古い形態である。中には氏神の牛深八幡神社の神札などが納められている。さらに高さ30cmほどの塑像が祀られている。胸に当家の家紋が描かれており、先祖の像と伝承されている。この像は、天草土人形であろう。台所には火の神を祀る小祠がみられる。正月に鏡餅を供える場所は、神棚、床の間、荒神、薬局、診察室、そして井戸である。井戸にも神霊の存在が意識されていることがわかる。

機能別空間の配置と出入り口からみた住居観

道路に面した主屋の主たる機能は生業の場である。そのため一般的には連続する日常生活の場と接客の場が分離し、それぞれ独立した付属棟として主屋に接続されている。寝室や便所の位置も考慮すると、この住まいは日常生活より医業を優先した構造といえよう。一方、接客機能が重視され、オザシキは10畳の広さをもち優美な装飾が施されている。客用を兼ねた便所には、有田焼と思われるタイルが使用されている。また限られた敷地の中で比較的広い裏庭の空間が確保され、装飾的な植栽が行なわれている。丁寧に加工した石を積み上げた塀も、接客のための重要な装置になっている。現在は勝手口として使用

されているが、かつては裏口から客を迎え入れ、中庭を経てオザシキに至る動線が存在していた。海岸線が敷地に近く、勝手口は海に注ぐ川に接していたという。船を使用して客が訪れたことも多かったはずである。ちなみに当家では家族が亡くなったとき、仏壇の前に安置した棺を勝手口から出したという。裏口が単なる通用口というだけでなく、重要な客や非日常時の出入り口になっていたのである。ここには質素なオモテ側に対し、ウラ側に数寄空間を創る、かつての町人の住まいと重なる構造をみることができる。

なお祭礼の際、オクノマに緋毛氈を敷いてハレの空間に転換し、オザシキと連続させて道行く人に公開する習俗に注目したい。これは京都の祇園祭にもみられ、シモ側に配置した日常生活空間に対するカミーシモの秩序が顕在化するときである。

医院を兼ねた特殊な住まいであるが、綿密に計算された空間の配置がみられ、生業と住居観を考える上で貴重な資料といえよう。

*河野家の調査には、森のほか谷口弘美、椿原佳恵、西田麻美が参加し、本稿をまとめるに当たって参加者から情報の提供を受けた。また間取り図の作成は椿原と西田が担当した。